

数学という名の自由の翼

第26回 2017年1月



グループワークを始める前に

最近、アクティブ・ラーニングの進展とともに、「グループ活動だと教科書が終わらない、グループ学習は騒がしく秩序が乱れる、グループになじめない生徒はどうするんだ・・・」などという声を聞くことが多くなりました。

それに対して、「グループワークに慣れない先生も多いかもしれないけれど、できない理由を探すのではなく、どうすれば教室という空間が、良い人間関係を築く安全・安心の場になるか、日々工夫するのが教師の役割かもしれませんね」などと応じてきました。なぜなら、このような疑問を発する人の心の裏には、「私はグループ活動が嫌いなのでやりたくありません」という思いが見え隠れするからです。

もちろん、私は、グループワークを積極的に行おうと考える派です。グループワークなんか嫌だと思っている教師や生徒が、経験してみたらとても充実し、自分が変わった、と思えるようになって欲しいと思っています。

白状すると、それは、私自身の経験でもあります。私は、学生時代、黙々と一人で勉強していました。グループでの学びあいなんて大っ嫌いの糞食らえでした。クラスの中にいる、ポジティブでクリエイティブな人たちに、ある種の羨望の気持ちを抱きながらも、自分はそんな世界と距離を置いていました。それは、自分の弱点や、失敗する姿を人前にさらすのが恐ろしかっただけなのでしょう。もちろん、一人で黙々と勉強することは大切なことで、それによって、自分自身多くのものを得てきました。でも、他者との協働によって、新しい価値を創り出したり、人への優しさや共感する力を身につけるなど、自分の可

能性をもっと広げることができたのではないかと今は思うのです。

現在、私は、校種、職種、年齢、国籍などを超えて、多くの人たちと学びあう機会に恵まれています。すると、かつて自分がガチガチに身にまとっていたプライドや自意識過剰が無くなり、自分が確実に変わってきたと実感しています。私のような年齢になってからでさえそうならば、若い人たちならなおさらではないかと思えます。

そんな私の思いを子ども達にも味わって欲しいし、アクティブラーニングブームを捉えて全体のもので、教室をいじめのない安心な空間に変えていくチャンスでもあると思っています。

ところが、最近、グループワークを取り入れた授業を参観する中で、ある種の違和感が芽生えてきました。そして、グループワークの危険性について気になるようになってきました。

それは、グループワークによって、授業の雰囲気暗くなったり、人間関係を気まずくしてしまうような、そんな悪いムードを助長するような授業を目の当たりにすることが結構あったからです。

そこで、今回と次回の2回にわたり、グループ活動について、まとめてみようと思います。今回は、3つの事例を紹介しながら、私の抱く違和感について記してみます。

最初の事例は、ある高校の数学の授業からです。授業の冒頭、先生は「これからはアクティブラーニングの時代だ。だから今日はグループで話し合っ

新しい単元に入ったところなので、グループワークでどのような問題解決を仕掛けるのか期待していたのですが……。彼は、いきなりプリントを配り出しました。そのプリントは教科書に書いてある問題が10個ほど書かれているものでした。そして「じゃあまわりと相談して問題を解いてください」といって、30分以上生徒を放置してしまっただけです。

先生は、ぐるぐる机間巡視し、時々、やる気のない生徒に声をかけたり、「どうやって解くんですか〜」と答えを欲しがらる一部の生徒達のところで話し込みたりしています。途中で先生が、「自由に移動していいんだぞ」というので、だんだん友達どうしの集まりになっていきます。

すると案の定、問題を解こうとする生徒、何もしようとしていない生徒、何をしたらよいかわからない生徒、一人で何かを書いている生徒、何人かで数学ではない話で盛り上がっているグループ、先生が近くとやっているフリをする生徒、堂々と居眠りする生徒などが出現します。

そしてついに悲劇が起きます。消しゴムをぶつけていたずらする生徒が出てきてしまい、それを見た先生がぶち切れて説教に。クラスに陰悪なムードが漂うという、恐れていた展開になってしまいました。

授業後、授業者の彼が助言を求めに私のところに来ました。いくつか問題点を指摘したのですが、多分彼の心には届かなかったように思いました。そして、彼は私にこのようにいいました。

「生徒に主体的に学ばせるような授業を行ったけれど、うまくいかなかった。やっぱりアクティブラーニングってだめですね」

ああ。彼は、自分の授業が失敗だったことは自覚しているようだ。しかし、その原因は「主体的な学び」にある、と知っているんですね。主体的にしなければ良かった、と。皆さんどう思いますか。

でも、これは、特別な事例ではなく、あちこちで繰り広げられているケースではないかと思うのです。

「アクティブラーニングをやれと上から言われた」
→「だからグループワークやったよ」→「だめじゃ

ん」→「やはりアクティブラーニングが諸悪の根源だ」という、「背理法」もどきのロジックが発動されているんですね。

次の事例は、「学びの共同体」を掲げる、ある地域の中学校の授業を観たときの話です。先生の「じゃあ、グループになって」の一言で、生徒は、音も立てず（机の脚にテニスボールがついている）瞬時に机をくっつけます。その素早さに、私は目を丸くしました。そして、グループ内に「司会係」「用具係」「まとめ係」などが割り振られ、先生の合図で彼らはきびきびと動きます。「グループで話し合いなさい」というと、まるでスイッチが入ったように、ペアやグループ内対話が起きます。先生は、その「心地よいザワザワ」に目を細め、話し合いの後に、何人かの生徒を指名し見事な発表をさせます。着地も成功、素晴らしい授業、一丁上がり、てなわけです。

でも、私は、生徒の話し合いの様子を見たとき、「目の前にいる相手に話しかける」対話ではなく、「話している様子を第三者に見せるため」の演技のようにも思えてしまいました。うがちすぎと言われるかもしれませんが、でも、高校に入って、こんな管理された、ある種お手盛りのグループワークを行うといわれたら……。うーん……。嫌だろうなあ……

最後の事例は、ある小学校の課題研究授業の様子です。この学校は文科省の指定も受けているということで、それは見事な授業でした。小学生が、こんな凄い街づくりの提言をするのか、と驚嘆しました。しかし、その動画をじっくり観ると、素晴らしい発表を行ったり、グループ内で持論を展開し見事に合意形成を行ったりするのが、特定の子どもであることに気づかされるのです。

他の子ども達は、そのグループ内で、リーダーに協力すべく、脇役のポジションで頑張っているわけですが、もちろん脇役のポジションにも価値を与えているわけですが。でも、であればこそ、その子ども達の健気さに、私は複雑な思いをいだき、少し胸が

痛くなったのです。

クラスの中に、一軍メンバーと二軍メンバーがいる。グループ活動がこのようなヒエラルキーをつまびらかにしてしまったのではないか。一方的な授業ならば、それは顕在化しなかったかもしれないのに。

これは、言い過ぎかもしれませんが。でも、私の胸の痛みの理由は、自分の過去の嫌な経験とシンクロしてしまったからでもあるのです。

多くの先生方は、教師の合図や号令で、グループ内の話し合いが活発になる（ならねばならぬ）と思っているのではないのでしょうか。だから、話し合いが低調だったり、参加しない生徒がいると、それを生徒のせいにしてしまう先生もいます。「何でお前たちはネガティブなんだ！」などと。

そして、真面目で一生懸命な教師ほど、全力で頑張った見返りとして、全ての生徒から信頼されたい、全員を完璧に動かしたいという願望が人一倍強いのかもしれません。でも、そんな思いから、うまくいかないと腹を立てたり、叱責したり、ひどく落ち込んだりするの是不健康で危険です。私は、このような思い込みは、教師特有の「イレイショナルビリーフ」かなと思っています。

イレイショナルは、irrational つまり rational (理のある) の否定。ビリーフ (belief) は信念という意味なので、irrational belief とは、「非理性的な思い込み」というカンジになるのでしょうか。

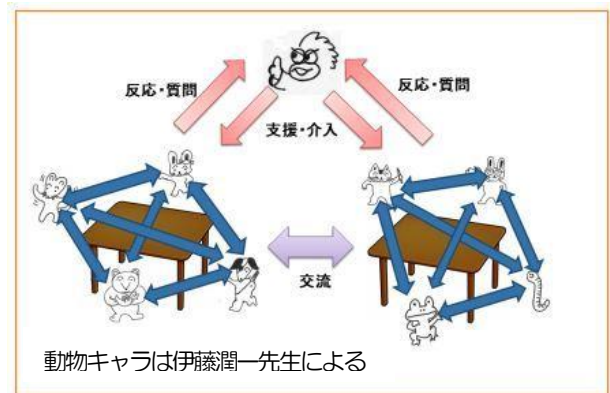
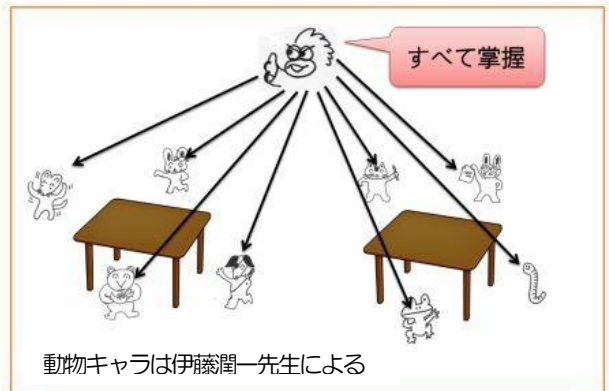
余談ですが、「無理数」のことを英語で、irrational number といいます。rational number が有理数なので、無理数とは「有理数ではない数」という意味になります。でも何か変ですね。そもそも、有理数（理のある数）ってなんでしょう。有理数は、整数の比（の値）で表すことができる数（分数）なので、本当は「可比数」とでも言いたいですね。

実は、もともと有理数は、ratio-nal number と書かれていたのですが、ハイフンをとって、rational として訳してしまったために、「有理数」となったといわれています。

ratio は「比」のことなので、ratio-nal は文字通り「比にできる」ということになります。有理数は誤訳だったというわけです。

すみません。本題に戻ります。

昔は、私は自分のキャラや、パーソナリティを過信した「しゃべくり」で生徒の顔をこちらに向けさせようとしていたこともありましたが、でもだんだん年を重ねるにつれ、それに限界を感じました。そして、気にすべきは、生徒と教師の関係性よりも、グループ内の生徒どうしの心的齟齬だと思えるようになりました（図参照）。



そこで、今は、グループワークを行う際には、自分語りによって教師の方向に目を向けさせるのではなく、適当なアイスブレイクによって、グループメンバーどうしに目を向けさせ、空気をほぐしておくことに気を配っています。

紙面が尽きました、次回も、そのアイスブレイクの具体的な事例を紹介したいと思います。